〔報告書様式Ｃ〕
【学力向上フロンティア用中間報告書様式】

都道府県	愛　知　県

Ⅰ　学校名及び規模

学校名	新城市立東郷中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	３	３	３	１	１０	２３
生徒数	９９	１０６	１１７	３	３２５	

Ⅱ　研究の概要
１　研究主題

３０分モジュール授業とストリーム

２　研究内容と方法
１実施学年・教科

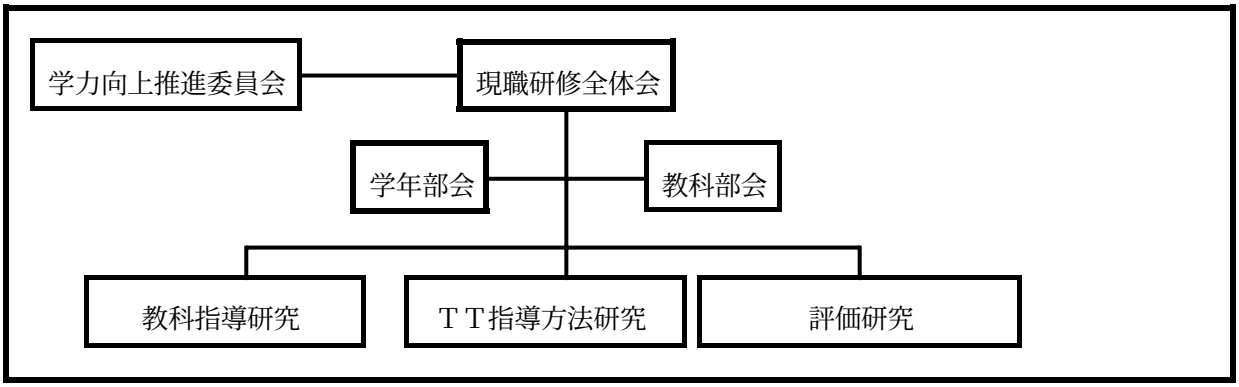
○ 授業時間の工夫（全学年）
・英語、数学の30分モジュール授業
　毎日、英語・数学を学習することで、生徒の英語力、計算力を確実に高める。各学年３学級30分授業の連続３コマ実施するため全校体制で時間割の工夫に取り組む。
・基礎の学習
　裁量２時間、総合的な学習の１時間を利用し、30分モジュールの１コマとして位置付け、基本的な学力の定着を図るため。
○ ストリーム（習熟度別学習：全学年）
・習熟度別に学年を編成し、学力の定着を図る。可能な限り、少人数授業を工夫する。

２年次ごとの計画

平成15年度	○ テーマ：３０分モジュール授業とストリーム ○ 研究の見通し 授業時間の工夫（30分モジュール授業）とストリームについて取り組む ○ 研究の内容・方法 すべての生徒にわかる授業をいかに構成するかを出発点に、英語、数学の２教科にしぼって取り組む。毎日取り組むことが学力向上につながるとの思いから、月曜から金曜まで30分モジュール授業を実施した。毎日、英語と数学を実施するために、それぞれ30分授業とした。裁量の時間を使った「基礎の学習」を取り入れて、計３コマの組合せによる日課を構成する。これを30分モジュール授業とした。また、ストリームは年間を通して実施することは教科担任の構成状況から難しいため、学期に１回、テスト前3日間で実施することとした。 １学期は、英語、数学、基礎。２学期は英語、数学、国語の３教科で30分モジュール授業を実施した。このモジュール授業は、１、３年生は通常日程の１・２時限目に、２年生は、３・４時限目に実施した。各学年とも３学級なので、こうした時間割りを組むことができる。例えば３年Ａ組では、基礎、英語、数学の順で毎日同じ時間帯に30分ずつ３コマ授業をする。生徒が教室移動する必要がなく、授業への取りかかりは早い。

平成16年度	○ テーマ：３０分モジュール授業とストリーム ○ 研究の見通し 授業時間の工夫（30分モジュール）とストリーム（少人数授業）について取り組む ○ 研究の内容・方法 教科或いは単元によって30分授業より50分授業の方が効果的な場合もある。30分モジュール授業はそのままに、フレキシブルな時間割りを計画する。 例えば、英語はモジュール授業で毎週実施するが、セットになる２コマの教科を数学、国語理科、社会と振り分けたり、９0分授業として実施する方法も考えている。 ストリームは各学期３日間実施するが「いのこり学習」と組み合わせたりすることで、各教科の到達させたい段階まで全員を引き上げる努力を目指したい。さらに、習熟度別学習、少人数授業の工夫とともに、「目的テスト」としてがんばるものとする。

３ 研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１　研究の成果

①30分モジュール
まだ30分授業が生徒の学力向上に有効であるかどうかを実証することは難しい。3年生に行ったアンケートの結果、英語では30分授業のほうが学力がつくと思う生徒は79%、両方とも同じ14%、50分授業のほうが学力がつくは7%であった。約8割が30分モジュール授業のほうが従来の50分授業より学力がつくと考えていることがわかる。数学においては、約7割の生徒が30分モジュール授業のほうが学力がつくと考えている。おおむね生徒は、30分モジュール授業を肯定的にとらえている。
②ストリーム
特に学力が下位の生徒にとっては、効果的な学習形態であった。少人数でわかるまで教えてくれる、ということから生徒の意欲が伸びたように思われる。習熟度別にクラス編成することへの理解が生徒にできてきた。保護者の意識も肯定的で「わかる授業」としてストリームを認識している。ストリームの実施期間は初期のころは1週間であったが、指導者の教材研究ということからも3日間が適当であった。

２　今後の課題

① 30分モジュール
・ 英語は教科の特性から見て30分モジュールで効果的な学習ができる。
・ 国語は、漢字や言葉のきまりのような学習には有効であるが、文章の読解では短すぎる。
・ 数学ではドリル的なことはいいが、解き方を考える時間は30分では短い。
・ 教材研究を深め、焦点を絞ることがより重要である。
② ストリーム
・ 実施期間は3日間でよいが、各習熟度のクラスに合わせた授業を展開する必要がある。
・ 学力の高い生徒にも、より効果的な学習指導をするための教材研究が必要である。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

○学力テスト
　・目的：学力の定着状況を知るため
　・内容：前年度までの既習事項
　・時期：４月（全学年）　９月（全学年）　１１月（３年）
○プレテスト（期末テストを見越すものにするために）
　・目的：ストリーム（習熟度別学習）の編成のための資料
　・内容：学期間に学習した内容
　・時期：６月、１０月
○期末テスト
　・目的：学期間に学習した内容が定着しているかどうかを知るため
　・内容：学期に学習した内容
　・時期：６月、１１月

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

30分モジュール授業、ストリームともにその効果は明確ではない。しかし、毎日継続して同じ教科を学習できることは学力の定着にとって効果的だと思われる。
・　ストリーム期間中に学校を開放し、管内の教師に参加していただく。
・　研究授業の教科によっては、管内の教師にも参観を呼びかける。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること

【新規校・継続校】　☑　１５年度からの新規校　　□　14年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
□７～９学級　☑10～12学級
□13～15学級　□16学級以上

【指導体制】　☑小人数指導　☑ＴＴによる指導
□その他

【研究教科】　☑その他（全教科）

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有り　□無